

「鬼の善意」 東村山市の昔話かり(その一)

丘柳 茂生

今回は、東村山市に伝わっている御岳山に関係する昔話を紹介します。

この昔話は池田宗弘氏の書かれた「東村山の昔話」という絵本に掲載されているもので、東村山市むさしの幼稚園理事長の野沢秀夫様にご紹介いただきました。尚紙面の都合上原文を少し変えて掲載する事をご了承下さい。ではそろそろ始めましょうか…。

昔、秋津の者がその年の豊作を祈るために何人かでお宮参りにでかけたんだと。そこで、帰り道のこんだ。村の者の一人がふと遠くの谷のほうを見るつちゅうと、何だか知んねえが、谷底のほうに人影が動いてるのが見えただと。一体、何だんべえと皆で目を凝らすつちゅうと、不思議なことがあるもんで、この人影は上から下まで真赤だつたり、真青だつたりして、とても人間とは思えねえような奇妙な格好をしてて、村の者は気味悪かつたけれど、そんで



イラスト：紺野美織

も怖い物見たさも手伝つて皆でこわごわ谷底まで下り始めただと。

近寄つて見るつてえと、何てえこつた、こりやあ鬼じやねえか。そこにや太鼓を背中にしようつて虎の皮のふんどしをつけた赤鬼や青鬼が忙しそうに動きまわっていただ。

村の者は、岩かげにかくれていつたい何をしてんだんべえと、よく見るつちゅうと、鬼たちは谷川にジャブジャブ入つて

いつては、両手にたくさん氷のかたまりを取つてきてつけえ俵に一所懸命つめ込んでいただと。夏でも恐ろしく冷めてえ谷川の水のこんだ、鬼たちの手足はどれも紫色に変わつていたけんと、当の鬼たちはそんなことは知らん顔で、働き続けていただと。

「いつてえ何してんだや」

岩かげの百姓たちは首をひねつて考えたけんど、どうもさっぱりわからねえ。そんで、中でも勇気のある者が岩かげからはい出

して、こわごわ鬼に聞いてみただと。

「そんなんに、たくさん氷を取つて何すんだや」

さすがに声が震えちゃつたそうだけんど、そもそも鬼のほうじやあ氣楽に答えてくれただと。

さてさて鬼達は何で氷を俵に詰めているのでしよう。そして鬼の近くまで様子を

見に行つたお百姓さん達の運命は…。この続きは次号で。お楽しみに。

「古文書にみる
武州御嶽山の歴史」刊行と販売のお知らせ

武藏国の國魂の鎮る御嶽山に近世三百余年、神に奉仕した神主と御師六一軒。今は三一軒ですが、日々に古文書を伝えます。

この全国にも稀で貴重な文書に対しても法政大学と青梅市の共同学術研究として

一九九五年（昭和六〇年）「武藏御嶽神社及び御師家文書学術調査団」を組織、

二〇一三年（平成二五年）までには一七軒、

四万五千点の文書調査の大事業を終えました。

はじめての長期にわたる大学との共同事業でしたが、青梅市側から古文書の会の市民も多数参加、調査は市民の学習活動としても

学界から高い評価を得ています。

この成果を刊行中の二〇一三年に、公開講座「古文書にみる武州御嶽山の歴史」が

七回行されました。御嶽山の家々に伝わる古文書を史料とした講座で、御嶽山の人々が祭祀を行い、御社殿、神宝を守り、参詣人を迎へ、共同して暮らし続けた近世から近代の歴史を明らかにしました。

この講座の内容を一冊にまとめ、読みや



価格：2,400円

表紙写真 御岳登山鉄道㈱
「旧誘導滑車をヘリコプターで
滝本へ運搬する様子」

今回、更新工事で巻上制御方式をインバータ方式に変更し、四月一日の運転再開に向け準備を進めております。

第一章は、調査事業の中心だった、多摩近世史研究の恩人、法政大学名誉教授の村上直先生の「近世初期の御嶽山」で、歴史学の視点を、近世二〇〇〇年の平和と御嶽山の関係で述べて感動的です。先生は講座の後急逝、この文章が絶筆となりました。

続いて「祭礼と神事」「御師と神社」「神宝と将軍土賣」「社殿修復と資金調査」「参詣と観光」「講中と信仰」。新しい視点による、古文書に基づく御嶽の歴史的姿が描きました。

さてさて鬼達は何で氷を俵に詰めているのでしよう。そして鬼の近くまで様子を

見に行つたお百姓さん達の運命は…。

この続きは次号で。お楽しみに。

編集

武藏御嶽神社

平成二十八年三月二十五日発行
(年一回発行・非売品)

き

あ

と

まつわる昔話を紹介いたします。
お楽しみに。東村山市久米川講内海
鶴巻育子様、齋藤慎一先生、
片桐茂生様、北島知生様、須崎直成
様、須崎晃輔様、原島瑞葵様、玉穂
様を有難うございました。

定価：五五九円（税込）のところ、社務所では二四〇〇円にておわけ致します。

御嶽山の史料に基づいた、最も新しい

魅力的な内容です。そしてハンディです。（文・齋藤慎一）

印刷

㈱成和印刷

http://www.musashimitakejinja.jp/